



Title	脱ポストモダンの誠実さ : The 1975の “Sincerity Is Scary” におけるアイロニーと誠実
Author(s)	桑原, 拓也
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 51-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72733
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

脱ポストモダンの誠実さ

——The 1975 の “Sincerity Is Scary” におけるアイロニーと誠実——

桑 原 拓 也

1. The 1975 というバンド

The 1975 という奇妙な名のバンドは2013年にセルフタイトルのアルバムでデビューした。そして、アルバムのコンセプトカラーである黒を表現するように、メンバー自身も黒い衣服を身につけてステージに立っていた。それから3年後の2015年に、彼らは *I Like It When You Sleep, for You Are So Beautiful yet So Unaware of It* (『君が寝てる姿が好きなんだ。なぜなら君はとても美しいのにそれに全く気が付いていないから』) という非常に長いタイトルの作品であり、コンセプトも黒からネオン・ピンクに変化した。こうした点から、彼らがアルバムごとに一貫したコンセプトをもって制作に取り組んでいることがうかがえる。しかし、フロントマンにしてギター・ボーカルを務める Matthew Healy (マシュー・ヒーリー) は、1st アルバムの成功によるプレッシャーと、ファンが求める偶像と自身の姿の差異に苦しんでいた。そうした状況の中でも、バンドは危うげだが戦略的な音楽性と柔軟な発想でツアーをこなしていった。

そして2018年11月30日、彼らの最新作にして3rd アルバムとなる *The Brief Inquiry into Online Relationships* (『ネット上の人間関係についての簡単な調査』) がリリースされた。定額のサブスクリプションサービス¹ や YouTube での視聴が前提となった時代において、The 1975 は再び変化を遂げようとする。2018年6月に突如として先行シングル “Give It Yourself a Try” が発表され、同時にプロモーション・ビデオも公開された。そこには Joy Division² 譲りのギターリフ³ に加え、髪をオレンジに染めた Matthew Healy の姿が写し出される。彼らのイメージが前作と比較して変化したことを伝えるには十分なメッセージだろう。

こうした変化を意図的に生み出しコントロールしてきた The 1975 は、ついに現代の諸問

¹ 定額で音楽を聴けるサービスの総称。代表的なサービスとして Spotify や Apple Music などがある。

² Joy Division は1970年代後半から人気を博したポストパンクに分類されるバンドである。ボーカルの Ian Curtis が1980年代に自殺し、他のメンバーは後に New Order を結成する。

³ 音楽メディアの Pitchfork は Joy Division の楽曲 “Disorder” と “Give It Yourself a Try” の共通点に触れている。“‘Give Yourself a Try’ is constructed around a guitar line that feels overtly lifted from Joy Division’s ‘Disorder.’” (Cameron Cook, “The 1975: ‘Give Yourself a Try,’” *Pitchfork*, June 5 2018) <https://pitchfork.com/reviews/tracks/the-1975-give-yourself-a-try/> accessed Apr. 25 2019.

題を歌うバンドに成長を遂げた。3rd アルバムのタイトル『ネット上の人間関係についての簡単な調査』(以下、『ネット上の～』)は、今まさに論争的になりながらも社会に根付いたインターネットが主題となる。そうした社会の諸問題、特にインターネット文化への批判は確かに前作にも見られた。2nd アルバムのリードトラックである“Love Me”には変化しつつある現代の人間関係の在り方が潜在的に表現されている。「今ネットの友達と一緒にんだ」⁴や「評判になってるね、友達になろうよ/そして大事なことは知ってることにしないと」⁵というように、インターネット時代の人間関係を示唆する表現がある。前者は端的に“online”という言葉が使われているが、人間関係を構築していく様式として、後者の方が新作につながるフレーズとして適当だろう。2nd アルバムにすでに見られたインターネット時代における人間関係の様子は文字通り、『ネット上の～』顕著に現れることになる。

本稿では、『ネット上の～』における最重要な楽曲の一つ“Sincerity Is Scary”に焦点を当てて論じる。この曲は現代を形成するインターネット文化とその下支えをするポストモダン文化のアイロニーについて批判的に歌っている。本稿では、“Sincerity Is Scary”を脱アイロニーの実践だと位置づけ、アメリカの小説家 David Foster Wallace(デイヴィッド・フォスター・ウォレス)のアイロニー批判を踏まえ、この曲における誠実という概念について考える。

2. アイロニーと誠実

ここでは、『ネット上の～』のイメージを特徴づける曲として“Sincerity Is Scary”を取り上げる。この曲は示唆的な表現が多く、解釈の多様性を喚起するが、本稿ではアイロニーと文化の面に目を向けて論じていきたい。

まず、冒頭の「アイロニーはいいと思うんだ/文化が責められるべきなんだ」⁶という部分に注目しよう。この部分はアイロニーとそれを取り巻く文化の関係性を描写する。さらに続く一節では、「何よりもポストモダン的なやり方で痛みを隠そうとしているね」とポストモダンという単語が続く。“Sincerity Is Scary”の冒頭で、なぜアイロニーとポストモダンが示唆的に歌われているのだろうか。本稿では、その答えを David Foster Wallace というアメリカの作家に引き付けて考えてみたい。

Wallace は 1986 年に長篇 *The Broom of the System* (『ヴィトゲンシュタインの箒』)でデビューし、1996 年には 1000 ページを超える *Infinite Jest* を出版し、その百科事典的な情報量と実験的な構成によって全世界で話題となった。この作家と The 1975 の接点は、『ネット上の～』における“Surrounded by Heads and Bodies”という曲名が *Infinite Jest* の冒頭に由来することだ。あるインタビューにおいて、Matthew はこの曲が *Infinite Jest* に由来することを認めており、ドラッグ依存からのリハビリ中に読んでいたと述べている。⁷ *Infinite Jest* は一

⁴ “I’m just with my friend online” (“Love Me”)

⁵ “You look famous, let’s be friends/ and portray we possess something important” (bidi.)

⁶ “Irony is okay, I suppose/ Culture is to blame” (“Sincerity Is Scary”)

⁷ Matthew は“I was reading that [*Infinite Jest*] when I was in rehab.”と述べている。しかし、その直

度見たら死ぬまで見続けることになる映画をモチーフにした作品であり、娯楽に対する依存や薬物に対する依存といった種々の「依存」を描き出す作品である。そのため、ドラッグ依存のリハビリの最中にあった Matthew がなんらかの着想を得た可能性は否定できない。

それでは、なぜ “Sincerity Is Scary” が Wallace と関連するのだろうか。Wallace は 1993 年のインタビューにおいて、アイロニーとポストモダンの結びつきを指摘したうえで、アイロニー的な態度は当時 (1980 年代~1990 年代) ですでに有害なものになっていると示す。彼はインタビューの中で、「アイロニーとシニシズムはまさに 50 年代と 60 年代のアメリカ的な偽善が必要としたものだ」⁸ と述べている。つまり、アイロニー的な態度は時代の要請に応じたものであり、決して普遍性を持ってきたわけではないと指摘するのだ。さらに、アイロニーの効果について「嫌味やパロディ、不条理、アイロニーは物事の仮面をはぎ取って、その背後の不都合な現実を見せる」⁹ と説明する。この指摘によると、アイロニーをはじめとしたレトリックは物事の背後にある現実を暴露するという効果がある。ある物事に対してアイロニカルな修辞を適用することで、その物事に関する観点は表層的なものと深層的なものの二つに分かれるのだ。アイロニーが効果を発揮する場面は、権力の裏側を解き明かすときだ。だからこそ、政治的な権力は風刺を恐れる。

しかし、アイロニーが抱える真の問題点は「アイロニーは幻想の正体を暴くときに有用だが、アメリカにおける幻想の暴露は終わってしまったか再演されてきた」¹⁰ ということだ。アイロニーはある対象について二つの異なった見解を示すことができるが、その対象がすでにアイロニー化されたなら、アイロニーはもはやその効果を発揮することはできない。実際に、1950 年代から 1960 年代において、アイロニーはポストモダンの懐疑主義¹¹ と結びつくことによって新たな形式のフィクションを生み出すことにつながった。だが、1980 年代の時点で、Wallace はすでにアイロニーが有効ではなくなっていることに気づきつつあった。

こうした文脈を踏まえると、“Sincerity Is Scary” における冒頭のアイロニーとポストモダンの関係が見えてくるのではないだろうか。アイロニーという修辞そのものが有害なわ

後に “nobody reads it all the way! Everyone our age has got a battered, quarter-read copy of *Infinite Jest*!” と発言しており、読了していないことが示唆されている。(Sam Sodomsky, “The 1975’s Matty Healy Dissects Every Song on *A Brief Inquiry Into Online Relationships*,” *Pitchfork*, Nov. 27, 2018) <https://pitchfork.com/features/song-by-song/the-1975s-matty-healy-dissects-every-song-on-a-brief-inquiry-into-online-relationships/> accessed Apr. 27 2019.

⁸ “Irony and cynicism were just what the U.S. hypocrisy of the fifties and sixties called for” (Larry McCaffery, “A Conversation with David Foster Wallace by Larry McCaffery,” *The Review of Contemporary Fiction*, vol. 13.1, 1993) <https://www.dalkeyarchive.com/a-conversation-with-david-foster-wallace-by-larry-mccaffery/> accessed Apr. 26 2019.

⁹ “Sarcasm, parody, absurdism and irony are great ways to strip off stuff’s mask and show the unpleasant reality behind it” (ibid.)

¹⁰ “Irony’s useful for debunking illusions, but most of the illusion-debunking in the U.S. has now been done and redone” (ibid.)

¹¹ ポストモダニズムの一つの特徴として、真理の不在や直線的な進歩史観の否定などがある。ジャン＝フランソワ・リオタール、『ポスト・モダンの条件——知・社会・言語ゲーム』小林康夫訳、水声社、1989 を参照。

けではなく、それを取り巻く環境と用法に根本的な問題が存在する。そう考えるならば、「ポストモダン的なやり方で痛みを隠そうとする」とは、アイロニカルな態度でもって自身の感情を隠すことだと推測できる。そうしたアイロニー的な態度と対極に位置するものが“sincerity”、つまり誠実ということである。

しかし、“Sincerity Is Scary”を捉えるときに注意すべきことは、このアルバムのタイトルが示唆するように、インターネットという現代の要素について The 1975 は曲を書いていることだ。Wallace はアイロニーとポストモダンの関係性の危うさを明らかにしたとはいえ、1980 年代と 2019 年の状況が大きく異なっていることは容易に予想できる。それは主要なメディアの変遷からも看取できる。1993 年に発表したエッセイ “E Unibus Pluram: Television and U.S. Fiction”¹² において、Wallace はテレビと文学、さらにはアイロニーの関連性を見出すことで、テレビがもたらす中毒性について論じている。言い換えると、テレビは 1980 年代から 1990 年代にかけての支配的なメディアであったのだ。しかし、今日の社会においてテレビは未だにその支配性を失っていないにせよ、特に若者を中心にインターネット文化が普及し、支配的な位置を占めつつあることは事実だ。そのため、『オンライン上の～』を考察する際に、Wallace のアイロニー論を単純に応用するわけにはいかず、現代におけるアイロニーとインターネットの関係性も踏まえながら、改めて再考する必要があるだろう。

3. “Sincerity Is Scary” 読解

ここからは歌詞に焦点を当てて、“Sincerity Is Scary”についてアイロニーと誠実の観点から、歌われている内容について分析していく。歌詞の全文と筆者による和訳は本稿末尾に付した。この歌詞を素直に読んでいくなれば、うまくいかない恋愛について歌った曲だと判断できる。ただ、タイトルの “Sincerity Is Scary” というフレーズは一度も曲中に出てこないばかりか、誠実さというキーワードを想起させる言葉も並ばない。そのため、この曲における誠実の正体を明らかにすることから始める。

まず、タイトルを直訳すると『誠実さは恐ろしい』となる。誠実という言葉人間関係における道徳的な次元で考察することも十分に可能であるが、ここではアイロニーやポストモダンと関連する “New Sincerity” (「新たな誠実」) を経由して考えてみたい。

“New Sincerity” は、ポストモダン文化の後継として位置づけられ、アイロニー的な文化と距離を保ち、より率直に表現することとして簡潔にまとめられる。¹³ 似た用語として、“Post-irony” や “Post-postmodernism” などがあり、その点でも “New Sincerity” がポストモダニズムのポストに当たる位置づけだと考えることができるだろう。そして、“New Sincerity” はポストモダン的なアイロニーや嘲笑的な態度に対して、より誠実な態度を示す

¹² David Foster Wallace, “E Unibus Pluram; Television and U.S. Fiction,” *A Supposedly Fun Thing I'll Never Do Again*, 1998, Reprint ed., Little Brown, 1997, pp. 21-82.

¹³ 近年は David Foster Wallace の文学作品と “New Sincerity” の関係について扱われることも多い。Adam Kelly, “David Foster Wallace and the New Sincerity in American Fiction,” David Hering ed., *Consider David Foster Wallace: Critical Essays*, 2010, pp.131-146. を参照。

という理念に基づいた概念である。

アイロニーと“New Sincerity”の関係やその歴史について、仏文学・哲学を中心に研究する Christy Wampole は“*How to Live Without Irony*”¹⁴と題されたエッセイを書いている。その中で、彼女はアイロニーが私たちの時代と切り離せない関係にあることを指摘し、その影響が広告や政治、ファッション、テレビといった現代のほぼすべての分野に広がっていることを示す。アイロニーと日常生活が結びついた状況について、「アイロニーは最も自己保身的なやり方だ。なぜなら、アイロニーによって人は自身の選択や美的なもの、それからその他のものに対する責任から逃れられるからだ。アイロニー的に生きることは公共の場において身を隠すことでもある。(中略)とにかく、直接的なものは私たちにとって耐え難いものになってしまった」¹⁵と述べている。この指摘は“*Sincerity Is Scary*”とも共鳴する。冒頭の「アイロニーはいいと思うんだ/文化が責められるべきなんだ」という点はアイロニーが文化のモードになってしまったことを鋭く指摘しているし、「ポストモダンのなやり方で痛みを隠す」という点にはアイロニカルに保身を図る人物の姿が浮かび上がってくる。

さらに、Wampole はインターネットとアイロニーの結びつきについても言及する。実体よりもヴァーチャルなものが優先されるインターネットの状況は、直接的なものを回避し、間接的なオンラインに逃げ込むという点でアイロニー的な状況を示すのだ。アイロニーに侵された現代において、アイロニーに反旗を翻すものが“New Sincerity”ムーブメントだと位置づけられる。とはいえ、Wampole は“New Sincerity”ムーブメントが結局のところ失敗に終わったと結論づける。その理由は明示されていないが、アイロニーの影響力が今もなお人々の生活に深く根付いていると Wampole が考えているためだと推測できる。“New Sincerity”に注目が集まったことは事実であるが、日常の一部としてアイロニーが根づいた現代では効果的なアンチテーゼとして十分に機能しなかったといえる。

The Atlantic 誌に掲載された Wampole のエッセイは少なくとも一部のメディアにおいて反響を引き起こしている。例えば、“*How to Live with Irony*”は Wampole のエッセイが公表された三日後にウェブマガジンの *Electric Literature* に寄稿されたエッセイであり、タイトルからも Wampole のエッセイを意識していることが伺える。¹⁶ さらに、*The Atlantic* 誌にはより直接的に Wampole への返答として“*Sincerity, Not Irony, Is Our Age's Ethos*”というエッセイも寄稿されている。¹⁷ このエッセイにおいて、著者の Jonathan D. Fitzgerald は Wampole の

¹⁴ Christy Wampole, “How to Live Without Irony,” *The Atlantic*, Nov. 17 2012. <https://opinionator.blogs.nytimes.com/2012/11/17/how-to-live-without-irony/> accessed Apr. 26 2019.

¹⁵ “Irony is the most self-defensive mode, as it allows a person to dodge responsibility for his or her choices, aesthetic and otherwise. To live ironically is to hide in public...Somehow, directness has become unbearable to us.” (“How to Live Without Irony”)

¹⁶ Chris Knapp, “How to Live with Irony,” *Electric Literature*, Nov. 20 2012. <https://electricliterature.com/how-to-live-with-irony/> accessed Apr. 26 2019

¹⁷ Jonathan D. Fitzgerald, “Sincerity, Not Irony, Is Our Age's Ethos,” *The Atlantic*, Nov. 20 2012. <https://www.theatlantic.com/entertainment/archive/2012/11/sincerity-not-irony-is-our-ages-ethos/265466/> accessed Apr. 26 2019.

エッセイを精緻に批判しながら、現代でも誠実な姿勢が失われてしまったわけではないと論じる。確かにアイロニーが現代においても強い影響力を持っていることは事実だが、アイロニカルな態度が支配的というわけではなく、一部の文化において誠実さは残っていると Fitzgerald は指摘する。次の引用は最たるものだろう。

今日、かつて虚勢と顕示欲が支配したポップミュージックにおいて、可傷性が出現している。コナー・オバーストからレディ・ガガ、さらにフランク・オーシャンに至るまで、あらゆるジャンルのアーティストを見よ。(中略) また、ジョナサン・フランゼンやゼイディー・スミス、マイケル・シェイボンといった敬意を払われる作家たちが道德の強い意識をもって誠実で大衆的な作品を書いている。¹⁸

ここに挙げられたアーティストや作家が積極的に「誠実さ」を意識しているか、という点について触れることはしないが、確かに自身の弱さを作品に落とし込むアーティストや、フィクションにおいて率直な描写をすることにためらいのない作家も一定数存在する。その点だけで、誠実な態度がアイロニーに対抗的であるということはできないにせよ、2010年代において誠実さがある程度の存在感を持っていることは事実だろう。“Sincerity Is Scary” はこうした誠実と文化の文脈に位置づけられる楽曲だといえるだろう。

ここまでの議論を踏まえると、アイロニーは対象に一定の距離感をとることで自身を保護するような態度といえる。それに対し、誠実さとは自身の傷つきやすさ (=可傷性) をさらけ出すような態度だといえる。この文脈を介して解釈することを許容するならば、“Sincerity Is Scary” はアイロニー的な保身ではなく、現代において誠実であり続けることの恐ろしさと難しさを暗示している。歌詞のすべてのラインが誠実とアイロニーの関係を問うているわけではないにせよ、浮かび上がってくるのは自身や物事についてアイロニカルに思考する “You” (=きみ) と、“You” の態度に対して苦々しく思いながら忠告めいた言葉を並べる “I” の姿である。“I” が忠告する点は、主に “You” の自意識的な思考に向けられる。それがよく示されている部分は Verse 2 の部分だろう。「どうして自分の受け取られ方をコントロールできるなんて思うんだ? / 全力を尽くしたって自分の感覚はほどほどにしかわからないのに」というラインには、自身の受け取られ方について他者をコントロールしようとする “You” に対する批判を読み取ることができる。直接的な感覚ではなく、メタ的な自意識をもって他者による自身の受容を変化させられると信じる態度に “I” は懐疑的になるのだ。

さらに、“I” は「きみだけなんだ/きみを騙しているのは」と “You” の自己欺瞞を指摘する。「ポストモダン的なやり方で痛みを隠す」という部分と共鳴するこの一節は、自身の

¹⁸ “Today, Vulnerability shows up in pop music where bravado and posturing once ruled—see artists across every genre, from Conor Oberst to Lady Gaga to Frank Ocean...And respected literary Authors like Jonathan Franzen, Zadie Smith, and Michael Chabon write sincere, popular books with a strong sense of morality.” (Sincerity, Not Irony, Is Our Age’s Ethos)

受容をコントロールすることで自分自身を保護することにもつながる。こうした指摘は、Matthew 本人が *Genius* という歌詞掲載サイトに寄せた「ともかく、自己意識や内省、アイロニーは人が持っている最高の防御機構だ。それか、ひどく冷笑的になるとか。」¹⁹ というコメントにもよく似ている。

以上の理由から、“Sincerity Is Scary”は“T”と“You”の恋愛を舞台にして、現代文化で未だに強い影響力を持つアイロニーによる保身や逃避を批判的に思考すると同時に、誠実であるからこそ直面する困難を歌った曲だろう。The 1975 はこうした誠実な姿勢を歌詞だけでなく、プロモーション・ビデオにも積極的に取り入れている。“Sincerity Is Scary”のビデオには多種多様なポピュラーカルチャーに言及するばかりか、The 1975 の過去の楽曲のセルフ・パロディも数多く使用されている。*NME* に掲載された記事 “The 1975’s ‘Sincerity Is Scary’ video – How Many Easter Eggs Did You Spot?”²⁰ はセルフ・パロディを数多く指摘しているが、その中でも明らかにバンドあるいは Matthew 自身が影響を受けたであろう Michael Jackson と David Foster Wallace という二人のアイコンとミュージカル *Singing in the Rain* が引用されていることに言及している。このビデオにおいて、Matthew は下記画像のように、Michael Jackson の代表的なダンスを自ら演じてみせる。²¹ Matthew は2013年の時点ですでに自身に最も影響を与えたアルバムとして Michael Jackson による *Bad* を挙げているし、²² 多くのインタビューで Michael Jackson がヒーローだと語っている。自身にとって影響力を持つアーティストである Michael Jackson の明白なオマージュを見せることもまたアーティストとしての誠実な態度の一つだろう。

パロディやパステーシュという形ではなく、直接的な引用として自身が演じてみせる



ことは、アーティストとして Matthew が The 1975 の曲世界に入り込むことでもあり、作曲者と曲を分かちことなく共鳴させる表現形式として「新たな誠実」を実践した作品なのかもしれない。この意味で、インターネットが重要な役割を果たす間接性の時代に、直接的な表現を追求しようとする The 1975 は新たな表現を獲得しつつあるといえるだろう。

¹⁹ “Or at least they [self-awareness, self-scrutiny and irony]’re the best defense mechanisms that you’ve got. Or like be really sardonic.” From *Genius*. <https://genius.com/The-1975-sincerity-is-scary-lyrics> accessed Apr. 27 2019.

²⁰ Rhian Daly, “The 1975’s ‘Sincerity Is Scary’ video – How Many Easter Eggs Did You Spot?” *NME*, Nov. 22, 2018. <https://www.nme.com/blogs/nme-blogs/easter-eggs-1975s-sincerity-scary-video-2411221> accessed Apr. 28 2019.

²¹ 同アルバム収録の “Love It If We Made It” にも Michael Jackson をオマージュしたダンスが挿入されている。

²² Chandra Johnson, “Five Life-Changing Records that The 1975 Recommend,” *MTV*, Nov. 6, 2013. <http://www.mtv.com/news/2699450/five-life-changing-records-the-1975-recommend/> accessed Apr. 28 2019.

本稿では、The 1975 の『ネット上の～』に収録された “Sincerity Is Scary” の歌詞を通して、その背後にあるアイロニー文化への批判と誠実さの関係について論じてきた。しかし、本稿で論じてきたことは文化的な背景にすぎず、The 1975 というバンドや楽曲そのものについての本質的な批評にはなりえない。この曲はジャズのようなイントロやゴスペル的なコーラスなど、様々な影響を感じさせる曲でもある。本稿はそうした楽曲の豊かな創造性を理解する補足であり、この曲についての多様な解釈を喚起する第一歩になると考えている。

4. “Sincerity Is Scary” の歌詞と全訳

Verse 1

Irony is okay, I suppose; Culture is to blame

アイロニーはいいと思うんだ 文化が責められるべきなんだ

You try and mask your pain in the most postmodern way

何よりもポストモダン的なやり方で痛みを隠そうとしているね

You lack substance when you say something like, “Oh, what a shame”

本心じゃないだろ きみが「ああ、なんてひどいんだ」みたいなことを言うときは

It's just self-referential way that stops you having to be human

自己言及的なやり方は人間性を殺してしまう

I'm assuming you'll balloon when you remove the dirty spoon and start consuming like a human, that's what I am assuming

汚いスプーンをどけて人間みたいに消費しようとするば きみは膨らむだろうと思ってるよ そう思っているんだ

Pre-Chorus

I'm sure that you're not just another girl

きみがその辺の女の子と一緒にはずなんてない

I'm sure that you're gonna say that that was sexist

きみがそんなところを性差別主義者だって言うのもわかってる

I feel like you're running out of all the things I liked you for

好きだったところがどんどんなくなっていく気がするよ

Chorus

Why can't we be friends, when we are lovers?

恋人でいるときにどうして友達になれないの？

Because it always ends with us hating each other

だって結局のところ憎みあって終わるんだから

Instead of calling me out, you should be pulling me in

呼び出すかわりに 引き入れてくれよ

I've just got one more thing to say

もう一つ言っておくことがある

Verse 2

Why would you believe you could control how you're perceived?

どうして受け取られ方をコントロールできるなんて思うんだ？

When at your best you're intermediately versed in your own feelings?

全力を尽くしたって自分の感覚はほどほどにしかわからないのに

Keep on putting off conceiving

子ども(考えること)は先延ばしにしておけよ

It's only you that you're deceiving

きみだけなんだ きみが騙しているのは

Oh, don't have a child, don't cramp your style, I'll leave it

ああ 子どもを作っちゃだめだ 自分を抑えつけないで もういいよ

Outro

I'm just pissed off because you pied me off

きみがこっちの悪口を言うから怒っているんだ

After your show when you let go of my hand

きみがこの手を離す見せ物の後のことだよ

In front of some sket who wanted bit on your

それもきみ責め立てようとするだらしのない奴らの前でね

Nah, I'm just messing

もうめちゃめちゃだな

本稿において、“Sincerity Is Scary”はアイロニーと誠実の関係性についての曲だと提示してきた。しかし、The 1975の曲にドラッグカルチャーは重要な要素であり、ドラッグについての曲だと考えることもできる。例えば、“substance”や“balloon”、“spoon”といった単語からドラッグ文化に対する曲だと指摘することもできるだろう。しかし、本稿においてドラッグを積極的な分析対象として扱っていないため、アイロニーとの関係性を歌った曲だという仮定のもとで訳している。

“You lack substance”の部分は直訳した場合、「きみは実体を欠く」となるが、文脈を考慮して「本心を隠している」とした。しかし、この部分は文字通り「実体を欠いている」と捉えることができる。これは“Sincerity Is Scary”の根幹をなすといっても過言ではないが、

インターネット時代において直接性は忌避され、間接性が重視される。こうしたインターネット時代のコミュニケーションの在り方について、Wampole がアイロニーの影響を指摘したように、間接的な表現を使うことで自身を世界における直接的な実体として捉えがたいものにしているのだ。ここでは“*Oh, what a shame*”²³の部分が間接的な表現に相当する。つまり、物事に対して率直な感情を向けることなく、間接性を保ったメタ的な視線のもとでコメントをする“*You*”の態度は文字通り「実体を欠く」ことになる。

“*I’m assuming you’ll balloon when you remove the dirty spoon and start consuming like a human, that’s what I am assuming*”の部分はドラッグを意識しているだろう。“*the dirty spoon*”はドラッグを溶かすスプーンだと見当がつく。そのスプーンを片付けるという部分から、ドラッグの使用を中止するという含意を読み取ることができる。“*start consuming like a human*”の部分については決定的なことは言えないものの、人間を実体のあるものだと考えるならば、感覚を鈍らせるドラッグもある意味で逃避や自己防御の一種だと考えることはできないだろうか。Matthew が“*Sincerity Is Scary*”について“*human*”を重要視していることから直接性を有する実体として人間を仮定することができるだろう。

“*Keep on putting off conceiving*”の部分は“*conceive*”に「妊娠する」という意味があること、さらに続く部分で“*don’t have a child*”と歌っていることから「子どもは先延ばしにしておけよ」とした。*Genius*に寄せたコメントでMatthewは、「年を重ねるというよりも、人として大人になるにつれて、本当に誠実でいることが難しくなることがわかった」²⁴とコメントを寄せている。子どもを持つことが大人になることだと考えると、誠実な態度を保つために子どもを持たないように“*You*”を説得していると解釈できる。しかし、“*conceive*”は「想像する」や「考える」という意味もあるため、文脈も考慮し、両方の意味をとることができると考えられる。

Outroの部分は、アイロニーを批判する“*I*”が“*You*”に半ば裏切られるような場面だろう。“*You*”が“*I*”を拒絶するこの場面において、“*I*”はまさしく誠実でいることの困難さを知ることになる。結局、“*I*”は“*You*”に拒絶されるという場面でこの曲は幕を閉じるのだ。

²³ “*what a shame*”というフレーズはThe 1975の2ndアルバムに収録されている楽曲“*Love Me*”でも歌われているため、セルフ・パロディとしても考えられる。

²⁴ “*As I’ve not gotten older, but as I’ve grown up, as a person, I just find that it’s harder to be really sincere,*” *Genius*.